

# 大伴坂上郎女伝私考その一

小野寛

## はじめに

大伴坂上郎女は万葉集中個人第三位の歌数を誇り、女流歌人の筆頭に位する。坂上郎女の歌は八十四首、元正天皇の養老五年（七二一）の作品に始まり、聖武朝を経て、孝謙天皇の天平勝宝二年（七五〇）の越中のわが娘坂上大嬢に贈る歌まで、三十年にわたる作歌生涯は万葉第三期から第四期に大きくひろがっている。その間、郎女の歌に一貫して流れるテーマは「恋」であった。

坂上郎女の「恋」を語ることが坂上郎女研究（文学の研究）の目ざすところであるが、本稿はその坂上郎女研究の導入部として、郎女の「恋」の生涯を明らかにする、そのまた発端として、大宰府下向以前の郎女がかかわった三人の男性に焦点を置いて、若き郎女の生きざまを瞥見してみることになった。われわれに与えられている資料は限られている。新資料を発掘したわけではないので論文などと称して発表するのはおこがましいが、諸先学の驥尾に附してその周知の資料の解釈に自分なりの方法を施してみようとするのである。

一 穂 積 皇 子

京職藤原大夫、贈大伴郎女歌三首 卿、諱曰麿也

をとめらが珠匣なる玉櫛の神さびけむも妹に逢はずあれば（巻四・五二二）  
よく渡る人は年にもありといふを何時の間にそもわが恋ひにける（五二三）  
むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも（五二四）

大伴郎女和歌四首

佐保川の小石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来夜は年にもあらぬか（巻四・五二五）

千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もなしわが恋ふらくは（五二六）

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを（五二七）

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば（五二八）

右、郎女者、佐保大納言卿之女也。初嫁一品穂積皇子、被寵無儔。而皇子薨之後時、藤原麿大夫娉之郎女焉。郎女、家於坂上里、仍族氏号曰坂上郎女也。

京職藤原大夫は、養老五年（七二二）六月左右京大夫（（統紀による。公卿補任は「左京大夫」とする。））に任ぜられた藤原不比等の第四子、藤原麻呂である。その麻呂の歌にこたえた右の四首が、大伴坂上郎女の集中初出の歌であった。その左注によって、

われわれは坂上郎女の伝記の一端を知る。

郎女は佐保大納言大伴安麻呂の娘であり、初めに穂積皇子に嫁し、たぐうことなき寵愛を受けた。そして皇子の薨ぜられた後、藤原麻呂に「娉」せられた。郎女は坂上の里に住んでいたところから、一族の者どもは「坂上郎女」と呼びならわしたのである。

穂積皇子は靈龜元年（七一五）七月に薨じた。統紀同年七月二十七日の条に

知太政官事一品穂積親王薨。遣<sub>二</sub>從四位上石上朝臣豊庭、從五位上小野朝臣馬養、監<sub>二</sub>護喪事。天武天皇之第五皇子也。

とある。寿齡は不明であるが、屋敷頼雄氏は、

親王は天武の第五皇子であつて、第二皇子草壁（持統三年薨、壽二十八）や第三皇子大津（天武十四年賜、死年二十四）の寿齡から推し

ても、靈龜元年薨去の年は五十歳前後であつた事と思はれる。（春陽堂『万葉集』講座』第一卷）

と推定し、尾山篤二郎氏も同様に「五十歳ぐらゐと観ていいのである」（『大伴家持』の研究）と言っている。

穂積皇子は天武八年（六七九）五月の吉野の六皇子盟約に加えられていない。穂積皇子の母は蘇我赤兄の女太蕨娘であるが、それより身分の低い穴人臣大麻呂の女檜媛娘を母とする忍壁皇子がその六皇子中の天武の四皇子の中に加えられているのであるから、穂積皇子の不参加はその時まで成年に達していなかったからである。時に草壁皇子は十八歳、大津皇子は十七歳であつた。

天武の十皇子の長幼の順序は、青木和夫氏の研究によると次のようになっている。

実際の誕生順	高市	草壁	大津	忍壁	磯城	舎人	長	穂積	弓削	新田部
統紀による序列	(8)	(1)	(2)	9	(10)	3	4	5	6	7

( ) は推定部分

統紀に記された「第五皇子」から単純に、

天武第二皇子草壁が持統三年に薨せられた時が二十八歳であられ、若し此の年まで御在世とすれば、丁度五十四歳であつた筈である。また天武十四年御年廿四で賜死された第三皇子が大津が同じく御在世とすれば五十三歳であられるわけだから、それに比して謂へば、穂積親王薨去の御年齢を五十歳ぐらゐと観ていいのである。

(『大伴家持の研究』)

と言つていいのであろうか。青木和夫氏によれば、穂積は草壁・大津よりはるか下の第八皇子である。

書紀および統紀に記された叙位および増封の記事によつて研究されたと思われる緒方惟章氏の天智・天武皇子序列表(『有精堂』『万葉集』)を借り、簡略化して天武皇子の序列を表示すると次の通りである。

年	皇子名									
	高市	草壁	大津	忍壁	磯城	舎人	長	穂積	弓削	新田部
天武八(六七九)	③	①	②	④						
天武十四(六八五)	③	①	②	④						
朱鳥元(六八六)	③	①	②	④	⑤					
持統元(六八七)	②	①	/		不明					



津そして高市なきあと舎人と長がその後を次ぐのが順序であったが、穂積が第一位を占めるのは、年長であったこと以外の理由は考えられない。青木和夫氏の示された誕生順にはいかなる根拠があるのだろうか。

文武四年正月に新田部皇子が浄広武を授けられて、あとに続いた。この年六月、浄大参刑部親王の名が律令撰定メンバーの筆頭に見える。忍壁皇子の復権である。大宝三年正月、三品となった忍壁が二品を授けられている穂積をおいて知太政官事に任ぜられたのは、残っている天武皇子中最年長という年齢と経験によってであろう。忍壁は、天武八年の吉野盟約に名をつらねた天武の皇子中ただ一人の生残りである。

慶雲二年五月忍壁薨じ、同年九月穂積が知太政官事に任ぜられた。穂積が忍壁に次ぐ年長者だったことは言うまでもない。和銅七年正月に増封があり、統紀は「二品長親王、舎人親王、新田部親王、三品志貴親王益封各二百戸」と記している。この志貴親王は天智の皇子であり、天武の皇子の磯城は持統朝に没したかと推量される。天武の十皇子の誕生順は、正しくは次のようにすべきで、統紀の序列とはかなりのくいちがある。

誕生順(私案)	高市	草壁	大津	忍壁	磯城	穂積	長	弓削	舎人	新田部
統紀による序列	(8)	(1)	(2)	9	(10)	5	4	6	3	7

( ) は青木和夫氏推定部分

靈龜元年(和銅八年、七一五)、穂積薨年、高市・草壁・大津らが生きていたらその年齢は次のようになる。

高市 62、草壁 54、大津 53、忍壁 ( )、穂積 ( )、長 ( )、弓削 ( )、舎人 40

括弧の中にどんな数字を入れればいいのか、確かには知るすべはないが、叙位・任官・増封等の差によって、穂積は忍壁・磯城よりそれぞれ一歳以上年下であり、舎人より四歳以上年上と推定することができる。従って穂積の寿齡

は、四十五歳以上五十歳以下であった。

坂上郎女はこの穗積皇子に初めて嫁し、たぐいなき寵愛を受け、そしてこの最初の夫の死に遭うのである。「寵」は「愛」に同じく、いつくしむ意であるが、妻をいつくしむ場合は「愛」の字を書くのが普通だったと思われる。巻十六に

三八〇八左 ……是会集之中有鄙人夫婦。其婦容姿端正、秀於衆諸。乃彼鄙人之意、弥増愛妻之情、…

三八〇九左 ……時有所幸娘子也。寵薄之後、還賜寄物(俗云可多美)於是娘子怨恨、聊作斯歌献上。

の例がある。三八〇八は己れの妻を「いよいよ愛しぶる情増りて」歌を作ったという。三八〇九は、君主の寵愛を受けている娘子があつて、その「寵薄れぬる後に」形見を返されて怨恨の歌を作ったという。

また、巻十八に

四一〇六題 ……豈有忘旧愛、新之志哉。所以綴作数行之歌、令悔棄旧之惑、…

の例がある。もとの妻を忘れて新しい女を「愛づる志」などあつていいものかと記し、「旧を棄つる惑を悔い」しむるために歌を作ったというのである。

用例は少いが、女をめて、妻をいおしむ意には「愛」の文字をもって表現し、殿様の妾としてかわいがられる意に「寵」の文字を用いている。坂上郎女のこの婚姻を親王の嬖妾として聘せられたものとする説もあるが、それは尾山氏の言う如く「大納言大伴安麻呂及びその一門の面目を無視したあらぬ強説に過ぎなからう」。それにもかかわらず「被寵無儔」と記すのは、屋敷氏の「老齡の親王が、孤独の晩年に、殆ど孫女に等しい処女の郎女を召したのであ

る」とまでいうのは言い過ぎだが、久米常民氏がこの表現から「兩人の間には、かなりの年齢のひらきがあったであろうと推測される」(『万葉集の文』学論的研究)のは正しい。

和銅八年四十五歳〜五十歳で薨じた皇子の最後を見とった、年齢のひらきのある若い妻であり、それが彼女の初めての結婚であったことから、坂上郎女の年齢を推定するのが常道であるが、年齢決定は不可能に近い。

屋敷氏は、天応元年五月家持が左大弁となつて間もなく亡くした母というのが坂上郎女であろうと推定し、穂積皇子の薨年和銅八年の頃郎女二十歳前後との推定によれば天応元年は八十五、六歳になるので、

人間の命数としては少しく長過ぎる嫌がないでもない。併し必ずしも不可とすべき理由は無いから、郎女の歿年天応元年を動かせぬものと信ずる限り、常識的にも、その歿年を可及的に縮めるのが自然であらう。自分は郎女の推定年齢を、在来のそれより今五六年若く見たい。

とあるから、皇子薨時郎女は十四、五歳と見たのであらう。

これによれば大宝元年(七〇一)頃の誕生ということになる。青木生子氏は「便宜上仮りに郎女の生年を大宝元年とする屋敷氏説に従つておく」という。

尾山氏は天応元年歿の家持の母を坂上郎女とする説は否定し、それとは無関係に、令の規定に女子の結婚は十三歳からとあるのにより、五十近い人に嫁すのに十三歳はちと可愛想だし、さればとて初めて嫁すとあるからにはこれ以上遅らすわけにはいかないとして十六、七歳で嫁し十八、九歳で永別したとする。そして、

斯様に穂積親王の薨ぜられた際の郎女の年齢を仮りに十八歳とすれば、彼女の誕生は文武天皇三年になり、長兄の旅人は彼女が当歳の時已に三十六、七歳であつたことになる。



と記している。「文武三年」は「文武二年」の誤りかと、青木生子氏の指摘された通りで和銅八年（七一五）に十八歳にするには文武二年（六九八）の誕生でなければならぬ。

若山喜志子氏はおおらかに、

郎女はこの親王にどの位の年月を寵愛せられてゐたか不明であるが、親王の薨ぜられた靈龜元年が仮に郎女の二十歳の時として私はこの郎女の年齢を数へてゆく事にする。（春陽堂『万葉集』講座第一卷）

という。それによれば持統十年（七九六）の誕生ということになる。五味保義氏も皇子の薨時を「仮に坂上郎女二十歳頃と見て、郎女の年齢を推定してゆくことも可能である」という。また久米常民氏も、

従来の諸説が行なつたように穂積皇子に「寵まるること儔無し」とある左註の表現面のみから、年齢の非常にへだたつた晩年の皇子に愛されたものと推定し、その死去の折に、やつと二十歳前後の年齢だったものと推定することにとどめねばならないと考えるのである。

と、持統十年誕生説をとっている。

令の規定によれば女子の結婚は十三歳から許されることになっていた。それによれば穂積皇子に坂上郎女が嫁ぐことのできる上限は、持統十年誕生によると和銅元年に十三歳、文武二年誕生ならば和銅三年に十三歳、大宝元年誕生ならば和銅六年に十三歳となる。

和銅元年は、その三年前の慶雲二年（七〇五）八月に坂上郎女の父大伴安麻呂が大納言に任命され、九月に穂積皇子が知太政官事となつた。そして和銅元年六月二十五日穂積皇子との情熱的な恋の歌を残している皇子の異母妹但馬皇女が薨じた。続紀は次のように記すのみである。

三品但馬内親王薨。天武天皇之皇女也。

万葉集卷二に収められた但馬の歌は持統朝における若い二人の激しい恋のありさまを物語ってくれるが、その後の二人がどのような関係にあったかはわからない。統紀は文武三年九月に薨じた新田部皇女や同年十二月に薨じた大江皇女についても天智の皇女であったことを記すのみで、どちらも天武妃であり、新田部は舍人皇子の母であり、大江は長・弓削両皇子の母であることなどを記さない。天平十三年に薨じた泊瀬部皇女が川島皇子の妃であったこと、天平勝宝三年に薨じた多紀皇女が志貴皇子の妃であったことなども記さない。

穂積皇子に上道王と境部王の男子があり、孫女に広河女王と酒人女王があった。日野みつ子氏は上道王の誕生を持統六年、境部王の誕生を文武元年と推定して、

持統六年と文武元年誕生の上道王、境部王は但馬皇女との間の御子であろうか。それとも但馬皇女の他に妻がいて、その女性の生んだ子であろうか。もし皇子がすでに妻があるのにその一方で但馬皇女とかくも悲痛な恋愛をしていたのであれば、その上に坂上郎女を娶って儔なく寵愛されるといふことはなかったであろう。また、妻を娶らずに但馬皇女とだけ恋愛し、世間の非難を排して二子をもうけるに至ったのであれば、やはり皇女の生前に坂上郎女を迎えることはなかったのではないだろうか。〔大伴坂上郎女の伝記に関する考察〕 国語と国文学四六卷十号

と述べ、坂上郎女が穂積皇子に嫁したのは但馬皇女の薨じた和銅元年以後であった可能性が大きいという。

穂積皇子と但馬皇女との婚姻のことはわからないが、日野氏の推定の通り、親王と坂上郎女との結婚はやはり但馬皇女のなくなった後だっただろう。郎女の父大納言大伴安麻呂としても、但馬皇女との噂の高い四十男穂積皇子に幼い愛娘を嫁がせたのはそれなりの理由があつたことにちがいない。但馬皇女生前に嫁がせることはあるまい。安麻

呂は和銅七年五月に薨じ、翌和銅八年七月に皇子が薨じた。父親の死に遭って一年二ヶ月の間に結婚はありえない。娘女の結婚は父安麻呂の没後ではなく、その生前である。和銅二年から六年までの頃と思われる。坂上郎女は持統十年から大宝元年（六九六〜七〇一）の間に生まれたというところまでがせいぜい確かなことなのである。六年の幅を常に持ちながら考えてゆく以外にないのである。

## 二 藤原麻呂

皇子薨之後時、藤原磨大夫娉<sub>ニ</sub>之郎女<sub>ニ</sub>焉。

穂積皇子が薨ぜられた後、藤原麻呂が坂上郎女を「娉」したのである。「娉」は本来問うの意で、女を問ふことであり、「つまどふ」または「よばふ」と訓む。卷二に次の例がある。

九三題 内大臣藤原卿、娉<sub>ニ</sub>鏡王女<sub>ニ</sub>時、鏡王女贈<sub>ニ</sub>内大臣<sub>ニ</sub>歌一首

九五題 内大臣藤原卿、娶<sub>ニ</sub>采女安見兒<sub>ニ</sub>時作歌一首

九三は鎌足の求婚に対して鏡王女が答えたものであり、九五は「われはもや安見兒得たり皆人の得かてにすといふ安見兒得たり」と歌う通り鎌足が采女安見兒を得て歌ったのである。「娉」は「娶」ではない。

集中の例は他に次の通りである。

九六題 久米禪師、娉<sub>ニ</sub>石川郎女<sub>ニ</sub>時歌

一〇一題 大伴宿禰、娉<sub>ニ</sub>巨勢郎女<sub>ニ</sub>時歌

四〇七題 大伴宿禰駿河麿、娉<sub>ニ</sub>同坂上家之<sub>ニ</sub>嬢<sub>ニ</sub>歌

三七八八題 或日、昔有三男。同娉<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>女<sup>ニ</sup>也。娘子嘆息曰：

以上で全部であるが、いずれも求婚の歌である。三人の男に同時に求婚された娘子は身一つで三人の心を満足させることはできないと池に身を沈めた。三人と関係を結べるような女だったら死ぬことはなかった。求婚をした結果、女の承諾を得て己がものとするをいうのが「娶」で、「まく」または「めとる」と訓む。

藤原麻呂が穂積皇子の死後、若くして寡婦となった坂上郎女に求婚したのである。「薨之後時」を、屋敷氏は「喪あけの直後であったかと思はれる」と述べ、尾山氏は御忌開の靈龜二年八月以降と考えられる。「薨之後時」の集中の類似例を見てその用法を確認しておきたい。

一四九題 天皇崩後之時、倭太后御作歌

一六二題 天皇崩之後八年九月九日、奉為御齋會之夜、夢裏習賜御歌

一六三題 大津皇子薨之後、大來皇女從<sup>ニ</sup>伊勢齋宮<sup>上</sup>、<sup>レ</sup>京之時御作歌

二〇三題 但馬皇女薨後、穗積皇子、冬日雪落、遙望<sup>ニ</sup>御墓<sup>ニ</sup>、悲傷流涕御作歌

二〇七題 柿本朝臣人麿、妻死之後、泣血哀慟作歌

四四一題 神龜六年己巳、左大臣長屋王賜<sup>レ</sup>死之後、倉橋部女王作歌

一四九は歌の配列によれば天皇崩御の直後殯宮の儀が行われ始めるかどうかといった頃である。一六三は大津皇子が死を賜ったのは朱鳥元年十月三日で、大來皇女が伊勢齋宮から帰京したのはその年の十一月十六日と伝えている。

二〇三は但馬皇女がなくなったのは夏六月二十五日であったから、冬の日雪に包まれた墓を思うのはやはりその年初めて迎えた冬の雪の日だっただろう。二〇七の事情はわからない。四四一はやはり死の直後の歌であろうと思われる、

その配列もその年のものとしている。

「薨之後時」の文句はその生前ではなく死後のことであるということを表わしているに過ぎないのだが、それをわざわざ記して次の行為・行動を述べるのは、その薨時が射程距離の中にあるように思われる。前記諸例も、そのあとに年月日を記した一六二を除いて、すべてその年の内のことであると見ていい。

藤原麻呂が統紀に初めて名を見るのは養老元年（七一七）十一月十七日の条に、

授美濃守從四位下笠朝臣麻呂從四位上、介正六位下藤原朝臣麻呂從五位下。

とあるもので、養老元年十一月現在、麻呂は美濃介であった。年は二十三歳である。この昇叙は、美濃国当耆郡多度山の養老の美泉に感動した天皇がこの日靈龜三年を養老元年と改元し、国中の八十歳以上の老人に位一階を授け、美濃司および当耆郡司らに位一階を加えなどしたものである。藤原麻呂も美濃介としてこの恩典に浴したのであるから、おそらくその以前から美濃介として任地にあったであろう。一年前とすると靈龜二年秋であり、穗積皇子の御忌開とほとんど同時である。日野みつ子氏はこの事実を指摘して「麻呂が坂上郎女を婿うたのは養老二年以降であろう」と述べている。

藤原麻呂はその後、統紀に養老五年（七二二）正月從五位下から從四位上に叙せられる記事まで記すところが少ない。そして、その年六月左右京大夫に任ぜられたと記されている。「右」を衍字と見て、公卿補任には「左京大夫」とある。麻呂はこの時二十七歳。五年後神龜三年（七二六）正月正四位上に昇叙、同年九月聖武天皇の播磨国印南野行幸に当って装束司を命ぜられ、神龜六年三月には從三位に昇った。同年八月五日に天平元年と改元されたのだが、その改元の宣命に「京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等い凶負へる龜一頭献らくと奏し賜ふと聞しめし、驚き賜ひ恠み賜

ひ見そなはし欲び賜ひ嘉で賜ひて……是を以て神龜六年を改めて天平元年と為て……」とある。藤原麻呂は養老五年以来この年で九年、京職大夫の任にあったことになる。天平三年八月参議になったが、この時はすでに兵部卿であった。天平改元直後遷任されていたにちがいない。同年十一月初めて畿内に惣管、諸道に鎮撫使が置かれて、山陰道鎮撫使に任せられ、天平九年（七三七）正月持節大使兵部卿として陸奥国に派遣され、四月頃まで陸奥の任地に居たと思われる。四月十七日兄の参議民部卿房前が都に流行し始めた天然痘に感染して薨じ、この頃麻呂は都に帰っていたのだろう、兄に次いで七月十三日薨じた。享年四十三歳であった。

藤原麻呂の坂上郎女に贈る歌の題詞には「京職藤原大夫」とある。麻呂が京職大夫に任せられたのは養老五年六月であった。穂積皇子の没後六年目のことである。坂上郎女と麻呂との交渉を皇子薨後間もなくと考えるには、「京職大夫云々は必ずしも当職を意味せず、後に書き加へられたもの」（尾山氏『大伴（家持の研究）』）としなければならない。

麻呂の極官は先述の通り参議・兵部卿であった。天平二年乃至三年から天平九年に薨ずるまで七年乃至六年にわたってその官にあった。後に敬意をもって書き加えられたものならば兵部卿とあるべきだろう。京職大夫は正五位上相当官であり、兵部卿は正四位相当官である。麻呂は従三位としてこの官にあり、参議に列せられていたのである。長い期間にわたっていたとはいえ麻呂の生涯の途中での一官職に過ぎない「京職大夫」はその時の当職を示していると考えざるをえない。それは養老五年以降であり、その麻呂の贈歌と坂上郎女の和歌も養老五年以降であろう。坂上郎女が第一の夫穂積皇子と死別してもう六年以上の月日がたっていた。

麻呂の第一首五二二の「神さびけむも妹に逢はずあれば」は、あなたにしばらく逢わずにいるから自分は古びてしまったらうという心で、二人の關係はかなり古いものようである。第二首五二三の「何時の間にそもわが恋ひにけ

る」は、いつの間にかわたしはあなたを恋うるようになってしまったのだらうという心で、少くとも二人が最初に交渉を持ってからかなりの月日を経ているようである。第三首五二四は露骨である。「妹とし寝ねば肌し寒しも」と歌いやれるほどに坂上郎女はもう年たけて来ていたようである。

麻呂の三首に対する坂上郎女の和歌四首は郎女の集中初出歌であるが、四首それぞれに粉本にした類想歌があることは既に古くから指摘され、周知の通りである。

佐保川の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来夜は年にもあらぬか(五二五)

▽川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来夜は常にあらぬかも(卷十三・三三三、作者未詳)

佐保川の石を踏み渡って麻呂の乗馬である黒馬が私のもとに通って来る夜はせめて七夕のように一年に一度でもあってほしいと歌うのである。歌からは麻呂との仲は間遠になっているように思われる。

千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もしわが恋ふらくは(五二六)

▽阿胡の海の荒磯の上のさざれ波わが恋ふらくは止む時もし(卷十三・三二四、作者未詳)

私の恋の止む時もないということとをさざれ波にたとえる歌は既にあった。どこまでが真実の心であるか、郎女自身の詞句でないだけに疑わしい。

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを(五二七)

▽梓弓引きみゆるへみ来ずは来ず来ば来そをなぞ来ずは来ばそを(卷十一・二六四〇、作者未詳)

麻呂の来るといって待たせておいて来なかったことをなじるのだが、先行の作者未詳歌から学んだもので、本心はあやしまれる戯れ歌である。二人の仲はもうかなり古く馴れているようである。

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば(五二八)

▽機はたきの踏み木持ち行きて天の川打橋渡す君が来むため(卷十・二〇六二、作者未詳)

麻呂の通って来てくれるのを待っている心である。

第一首の結句「年にもあらぬか」は七夕歌の表現で、これは麻呂の第二首が七夕歌を粉本としているのに応じたもので、坂上郎女は和歌四首を七夕歌に構成している。「佐保川の小石ふみ渡り」は勿論実景でもあるが、天の川を渡ることからの連想が働いているにちがいない。「佐保川」で起せば、第二首は「千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波」と承け継いで、それを序として恋の止む時のないことを歌い、第三首は一転、全く趣向を変えて来ぬ人へのうらみの心を歌い、もう待つまいなどと言うが、第四首は再び第一、二首をうけて「千鳥鳴く佐保の川」を歌い、やはり恋しいあなたのおいでをお待ちして橋を渡しておきますと結ぶ。以上四首は四行詩の起承転結の構成を見事にふまえているではないか。

五味保義氏は、

和歌四首は坂上郎女初出の作であるが、その技巧は決して初心者流のたどたどしいものではない。この年(養老五年―筆者注)までに既に作歌の経験があったのに、作品が逸せられたものか、或いはかうした恋愛相聞の作風は、作者をめぐる当時の雰囲気としては、一般通念になって居って、この程度の作ははじめての製作でもさして困難ではなかったものであろうか。坂上郎女の作風は、真実心の吐露よりも、手なれた詞句駆使に其特長を見るのであり、そこに一つの才能を認めるとすれば、後者の場合であつたらうか。(「大伴坂上郎女」『万葉集大成』第十卷)

と述べている。手なれた詞句を駆使できるほどの年齢にもなっていたと考えていいだろう。この四首が先の夫穂積皇



子の薨後すぐに作られたとは思えない。麻呂が郎女を「娉」したのは、皇子薨後可能な限り早くしてもかまわない。それは求婚だからである。勝手な想像をすれば、その麻呂の度重なる求婚、強引で熱心な求婚に、いつか郎女は許したのであった。身を許した女はいよいよ熱してゆく。相手が若い麻呂であれば尚更のことである。それに対して男は冷えてゆくのだろうか。この贈答歌はその段階であり、それは皇子の死から六年たった養老五年のことであったとしよう。その年、麻呂は京職大夫になったのである。

### 三 大伴宿奈麻呂

大伴田村家之大嬢、贈<sub>二</sub>妹坂上大嬢<sub>一</sub>歌四首

外に居て恋ふるは苦し吾<sub>わが</sub>妹<sub>あな</sub>子を継ぎて相見む事はかりせよ（卷四・七五六）

遠くあらばわびてもあらむを里近くありと聞きつつ見ぬがすべなき（七五七）

白雲のたなびく山の高々に我が思ふ妹を見むよしもがも（七五八）

いかならむ時にか妹をむぐらふの汚なきやどに入りいませなむ（七五九）

右、田村大嬢・坂上大嬢、並是右大弁大伴宿奈磨卿之女也。卿、居<sub>二</sub>田村里<sub>一</sub>、号曰<sub>二</sub>田村大嬢<sub>一</sub>。但、妹坂上大嬢者、母、居<sub>二</sub>坂上里<sub>一</sub>、仍曰<sub>二</sub>坂上大嬢<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>時、姉妹諮問、以<sub>レ</sub>歌贈答。

右の左注は坂上郎女の伝記を知る上での貴重な資料である。坂上郎女が大伴宿奈麻呂に嫁して坂上大嬢の母となつたこと、宿奈麻呂は田村の里に住み、そこには一女田村大嬢がいること、郎女は宿奈麻呂の子をなしてからも坂上の

里に住み、坂上大嬢はその母のもとで坂上の里に育ったことを伝えている。坂上郎女は坂上の里を離れず、宿奈麻呂とは別居の關係にあった。

大伴宿奈麻呂は佐保大納言大伴安麻呂の子で、兄旅人、田主とも、妹坂上郎女、弟稻公とも異腹と言われ、また旅人・田主とは同母とも言われている。旅人・田主と同母兄弟であれば母は巨勢郎女、異腹であれば不明である。和銅元年正月に従六位下から従五位下を授けられたのが統紀に見える最初である。和銅五年正月従五位上に昇叙、靈龜元年五月に左衛士督に任ぜられた。この年七月穗積皇子が薨じたのである。靈龜三年（養老元年）正月に正五位下を授けられた。養老三年七月、初めて諸国に按察使が置かれ、その時備後国守宿奈麻呂を安芸・周防二国を管する按察使に任じたと統紀は記している。養老元年正五位下昇叙の時から備後守であったのかもしれない。同四年（七二〇）正月に正五位上が授けられ神龜元年（七二四）二月には従四位下が授けられている。統紀にはこれきり大伴宿奈麻呂の名を見ることができない。

万葉集には先に掲げた左注に「右大弁大伴宿奈麻呂卿」とあり、これは統紀には記されていない。右大弁は従四位上相当官であるから、統紀が記さなくなったあとの任官であろう。大伴宿奈麻呂の歌は巻四に五三二、五三三があるが、その題詞には作歌年次や官職等は記されていない。

坂上郎女が異母兄にあたるこの宿奈麻呂と關係を結んだのはいつであろうか。宿奈麻呂は穗積皇子が薨じた頃は左衛士督であった。それから二、三年後に備後守に任ぜられたのではないかと想像される。養老三年には備後の任地に居て安芸、周防にまでにらみをきかせていたはずである。その後の確かな任官はわからない。備後からいつ都へ帰って来たであろうか。坂上郎女との關係は養老五年以後と思われるが、それはいつであろうか。宿奈麻呂と坂上郎女と

の間に生まれた坂上大嬢の生年の推定からこれを考える以外に方法はなさそうである。

坂上大嬢は成人後大伴家持の妻となるのだが、巻八の春相聞の部の冒頭に配された

大伴宿禰家持、贈<sub>二</sub>坂上家之大嬢<sub>一</sub>歌一首

わが屋外に蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む（一四四八）

を、私は家持の青春の第一作であると考えている。これは天平四年の春の、家持十六歳の作であると推定している。

〔拙稿「大伴家持の青春」『五味智英先生還曆記念上代文学論叢』所収〕

巻四に次の歌がある。

大伴坂上家之大娘報<sub>二</sub>贈大伴宿禰家持<sub>一</sub>歌四首

生きてあらば見まくも知らず何しかも死なむよ妹と夢に見えつる（五八一）

大夫もかく恋ひけるを幼婦<sub>たなご</sub>の恋ふる情にたぐひあらめやも（五八二）

月草のうつろひやすく思へかもわが思ふ人のことも告げ来ぬ（五八三）

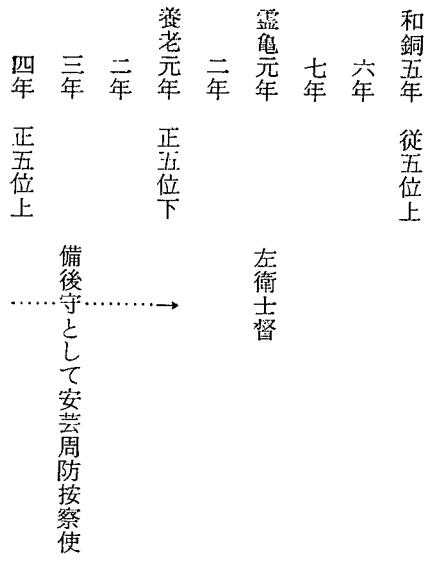
春日山朝立つ雲の居ぬは無く見まくのほしき君にもあるかも（五八四）

この四首は巻四の配列から家持と坂上大嬢との初期の恋愛における歌であることが明らかだが、私は、この四首を坂上郎女の代作だと考えている。その理由は、この四首が、起承転結の見事に整った四段構成の連作だと解され、これだけの歌は幼い坂上大嬢には無理な作品だと思われるからである。また、五八二の「幼婦」の用字は集中他に坂上郎女歌（巻四・六一九）にあるのみであるからである。そしてこの「幼婦」は、坂上大嬢がまだ幼い少女である意を含めている。

家持は坂上大嬢の幼なごに満足できず、笠女郎・山口女王・大神女郎らとの関係に移って行ったことを、巻四の歌の配列から、私は考えている。

家持を私案により養老二年（七一八）生まれとすると、坂上大嬢との出会いの年天平四年（七三二）は十五歳である。女子は十三歳で結婚を許されるのであるから、幼い坂上大嬢はその年齢以下であっただろう。十二歳ならば養老五年の誕生、十一歳ならば養老六年の誕生である。

養老五年と推定される藤原麻呂と坂上郎女との贈答歌のあることを考慮すれば、この年藤原麻呂と縁が切れ、異母兄大伴宿奈麻呂と結ばれたと考えることができよう。養老を中心とする宿奈麻呂の叙位任官の記録を年次に従って表示してみよう。



五年

(坂上大嬢誕生)

六年

七年

神龜元年 從四位下

?

右大弁

宿奈麻呂は養老五年国守の任を終えて帰京し、異母妹坂上郎女に再会し、藤原麻呂の足も間遠になっていたところで、結ばれたのであろう。

宿奈麻呂は田村の家に住み、そこには前妻の娘田村大嬢が居た。坂上郎女は変わらず坂上の家に住み、別居の夫婦であった。郎女は坂上の家で坂上大嬢を生み、次いで坂上二嬢を生んだ。

坂上郎女と宿奈麻呂との仲はいつまで続いたのか。宿奈麻呂は神龜元年に從四位下になり、その頃かその後か右大弁に昇進している。その頃神龜初年大伴氏の棟梁旅人は正三位中納言、六十歳であった。宿奈麻呂はその弟であるが、この位階の差は年齢に十歳余のひらきがあるのだろう。宿奈麻呂は從四位下右大弁で一族中で旅人に次ぎ、大伴道足が從四位下民部大輔で並んでいる。その後が大伴祖父麻呂で、從五位上式部少輔であった。

それから五年後天平二年(七三〇)六月のこと、卷四・五六六、五六七の左注に、

以前に天平二年庚午夏六月、帥大伴卿、勿ちに瘡を脚に生し、枕席に疾苦くろしぶ。此こゝによりて馭を馳せて上奏し、庶弟稻公・姪まゐ胡麻呂に遺言を語らまく欲しと望ひ請ふ。右兵庫助大伴宿禰稻公・治部少丞大伴宿禰胡麻呂の兩人に勅して、馭を給ひて發遣はし、卿の病を省しめたまふ。

とある。大伴氏一族の棟梁旅人が死を覚悟して遺言を語らんとして呼び寄せたのが、末の異母弟稻公と甥の胡麻呂であったという。一族中でも旅人に次ぐ高官であった宿奈麻呂の名がここにもない。年齢の点からいっても旅人より十歳は若いと思われるので九州への旅が無理だったとは思えない。続紀にも神龜元年以後の記事がないのである。宿奈麻呂は既にこの世になかったという外ない。屋敷氏も「神龜年中に卒したのではあるまいか」と述べ、尾山氏も「若し宿奈麻呂が存命ならばさういふ際第一に呼び寄せる筈だが」といい、「已に宿奈麻呂は他界してゐたのである」と断じている。

宿奈麻呂との関係が藤原麻呂とのそれより先ではなかったかとする論があるが、若山喜志子氏と久米常民氏の説が詳しい。若山氏の理由は、巻四の坂上郎女作の「怨恨歌」を「まだ若かった郎女が子まで設けた程の間柄になった宿奈麻呂にこそ真実本能的の恋をしてゐて別れ難い仲を別れた時の歌であると見る」ことから、その二人の間に突然若くて権勢のある藤原麻呂が現われて宿奈麻呂の足が遠くなったのではないかというのである。(前掲書)

久米氏は穗積皇子の薨じた靈龜元年から宿奈麻呂が備後守として按察使を兼任した養老三年までの四年間に、坂上郎女が異母兄宿奈麻呂の来訪を受け、その愛を受け入れたと見る可能性があるという。そして久米氏によれば、その間に坂上大嬢と二嬢の姉妹を生んだのである。藤原麻呂の出現は、宿奈麻呂の備後守在任中と考え、藤原麻呂が京職大夫になった養老五年六月以降とする。麻呂との贈答歌(五二二〜五二八)が、まだ任地にあつたらしい宿奈麻呂の「うち日さす宮に行く子」の歌(五三二・五三三)より前にあることも極めて暗示的であるという。穗積皇子の死にあつた悲しみを異母兄宿奈麻呂によって救われ二人の子までなして幸福になるかに見えたが、宿奈麻呂の地方官転出で中断され、二女の養育のみに明け暮れた生活を強いられたいところへ黒馬に乗った藤原氏の御曹司麻呂が現わ

れ、やがて夫宿奈麻呂の帰京によってその恋愛も結婚も同時に失われたというのである。(『万葉集の文』  
学論的研究)

右の論はまず、本稿冒頭に掲げた巻四の藤原麻呂の贈歌への和歌の左注に記された「皇子薨之後時」に藤原麻呂につまどわれたという注記の解釈を変更しなければならぬ点に問題がある。そして穂積皇子の薨後、養老三年までの四年間に服喪・結婚・二子の誕生をおし込むのは無理であろうと思う。更に問題なのは宿奈麻呂は養老三年以前から備後国守であったと考えられることである。

宿奈麻呂には集中二首の歌がある。その歌が藤原麻呂と坂上郎女との贈答唱和歌のあとに配列されているのだが、その歌は宿奈麻呂が備後守としての任地で詠んだものに違いないだろうか。その歌は次の二首である。

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首 佐保大納言卿之第三子也

うち日さす宮に行く児をまかなしみ留むれば苦しやればすべなし(巻四・五三二)

難波濁潮干のなごり飽くまでに人の見む児を吾しともしも(五三三)

藤原麻呂と坂上郎女との贈答唱和歌に次いで聖武天皇と海上女王との贈答唱和歌が配列されて、次にこの歌がある。その後は安貴王の歌と門部王の「恋歌」で、両者ともやや長文の左注があって、安貴王および門部王の「恋」のふるまい、いわば「恋の物語」が語られている。それらは、その物語歌風であるところが、その配列の中で目立って特異な存在である。宿奈麻呂の二首も、左注はないがどちらかと言えば恋物語歌らしい雰囲気と、何やら夢と、そしてローカルな味わいを持ってここに並んでいる。宮仕えに出る乙女は彼のひそかに思いを寄せていた娘だった。宮仕えに出ればその美しさが多くの人の眼に触れ、誇らしくうれしいことなのだが、彼の手の届かぬ存在になってしまふ。素材な村の男の声を聞くようだ。ローカルな味わいと言ったのはそれで、国守宿奈麻呂が任地で詠んだとは、私

は言わない。

この一群の恋物語歌はここにまとめて収載されたのであって、おそらくその蒐集の時点で配列されてもしたのであって、作歌時を示してはいないと思われる。その前に収載された二組の贈答唱和歌も類聚的配列ではないだろうか。その後の「神亀元年」「二年」の笠金村歌の収め方も、その次の「五年」の歌と共に類聚的な配列のしかたに思われる。作歌年月の明記されていない「相聞歌」を年代順にきちんと配列することなどできるはずがないのである。

宿奈麻呂の二首が配列によって養老五年以降、神亀元年以前の作品だということになると、宿奈麻呂と坂上郎女とが二女をなした時期の歌になったり、遠く任地にあつて都に残して来た妻を恋敵が襲っている頃の歌になったりするのである。

宿奈麻呂の評価は諸家さまざまであるが、私は、宿奈麻呂の存在を重視する青木生子氏の立場に立ちたい。宿奈麻呂は先にも述べた通り大伴氏一族の中で旅人に次ぐ人物であった。その妻となり二女をなしたことが、坂上郎女の一族中における将来の位置を決定したと思われる。